

すくすく たけのこ

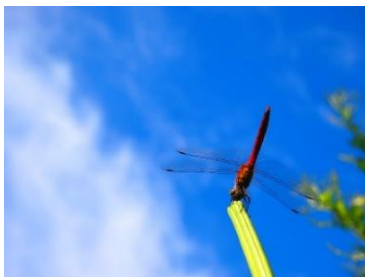


“気持ちを伝える” 親子のかかわり

「秋空や 子らに追われし 赤とんぼ」

本校には、東中振自然観察園という観察園があります。その中の農園には、初夏に「きょうだい活動」で植えたさつまいもや、黄金色に輝く5年生が育てた稲が大きく実っています。抜けるような青空を背景に、赤トンボが飛びかう風景は一幅の絵画のようです。秋はこうした情緒漂う“実りの季節”であると同時に、秋台風に代表されるような

“自然災害の時季”でもあります。「晴れの日もあれば、雨の日もある」との言葉があるように、子育ても、そうした自然と似ているのかも知れません。



◆ ◆
「何でも言っているのに！」「なぜ、いつもそんなの！」—— こんな言葉を子どもに投げかけながら、叱るたびに罪悪感をもってしまう体験は、親である誰しもが持つもの。かくいう私もその例にもれません。

では、叱らなければよい子が育つかというと、叱られないで立派に育った子はいません。『エミール』の著者で、フランスの思想家ルソーは、「子どもを不幸にするいちばん確実な方法は何か。それは、いつでも、なんでも手に入れられるようにしてやることである」と述べています。

子育てや教育で大事なことは「愛情」。無償の愛を受けた子は、秋の日差しをたっぷり受けて黄金色に輝く稲穂のように、実りという見事な“成長の姿”を見せます。ただ、その愛情には「厳しさ」もあることを忘れてはなりません。

大切なのは「叱らないようにすること」ではなく、「子どもに気持ちが伝わるような叱り方をすること」だと思のです。

日本アンガーマネジメント協会代表理事の安藤俊介さんは、つい言いたくなる NG ワードを4種類挙げています。

1つ目の NG ワードは「前もそうだった」「何度言わせるの」という言葉です。「今さら前のことを言われても……」「何度と言っても2度か3度だと思っただけ……」。こんな子どもたちの心の声も聞こえてきそうです。

2つ目の NG ワードは「なんで?」「どうして?」という言葉。例えば、食事中に食べ物をこぼしてしまった時に「なんでこぼしたの?」「どうしてこぼしたの?」ときつく問い詰められても、子どもは黙ってしまいます。それは、どうしてという理由がよくわからないからです。親もその理由が知りたい訳じゃありませんよね。

そして、3つ目の NG ワードは「いつも」「絶対」「必ず」という言葉です。これは、相手を決めつけたり、怒りを強くしたりする言葉です。子どもは、心の中で「いつもじゃないのに……」と思っていることが多いのではないのでしょうか。

最後、4つ目の NG ワードは「ちゃんと」「きちんと」「しっかり」という言葉です。これらの言葉は“程度”を表します。ただ、程度は、人によって基準が違います。だから、気持ちが正しく伝わりにくいのです。

No.	具体的な NG ワード
1	「前もそうだった」「何度言わせるの」
2	「なんで?」「どうして?」
3	「いつも」「絶対」「必ず」
4	「ちゃんと」「きちんと」「しっかり」



世の中は、「ほめて育てる」がブームとなっています。逆に「ほめているけど、少しも伸びないし、言うこともきかないんです。」という相談もよく受けます。しかし、「ほめる」「認める」に代表される「愛情」は、子育てにはとても大事なことです。

「ほめる」ことは、**子どものよいところや、できることを見つけてあげる**という見方もできます。子ども自身が気付いていなくても、「ほめる」ことでそのことを伝えてあげる。そのように、子どもを観察してよく見てあげることが「愛情」です。子どもにとって、「愛情」は「安心感」とも言い替えることができます。安心感は**“心のスキンシップ”**です。「自分は愛されている」「自分は必要とされている」という実感が、**子どもの心を安定**させます。幼いうちに注がれた「愛情」が、その子の「生きる力」となって、その子の将来を支え、未来を開いていきます。



また、大事なときに「叱る」ことも大切です。そういった意味で、**厳しさに裏付けられた「愛情」**も必要なのです。

作家の中谷彰宏さんは、『ほめて育てたほうがいいのか』『叱って育てたほうがいいのか』。それとも『ほめて、かつ叱ったほうがいいのか』。この質問は正しくありません。大切なのは『誰が』です。『叱るのはいいが、怒ってはいけない』。これも間違っていますが、肝心なことが抜けています。それは『誰が』です。(趣旨)。この主張は、大切な観点のひとつだと感じます。

もちろん、感情に任せて怒ってばかりではいけません。大切なのは子どもとの**「信頼関係」**です。これは、親と子、教員と児童でも同じです。

「信頼」のことを「橋を架ける」という意味で**「ラポール」**と言います。信頼する人、尊敬する人、好



きな人から「ほめられる」「認められる」から嬉しいのです。また、その人からたとえ厳しく注意されたり、叱られたりしても納得ができるのです。**ほめる、叱るという行為もこうした信頼関係の上に成り立っている**のです。

以下に成長につなげる「かかわり方」のポイントを紹介しておきましょう。

No.	成長につなげる「かかわり方」のポイント
1	やったことを認める ところから はじめよう
2	よくできたところに 気付こう
3	否定はせずに 次の課題を なげかけよう
4	次の課題は 本人に 決めさせよう



創価教育の創始者である牧口常三郎先生が、「生涯で最も感銘を受けた」という言葉を池田先生が紹介されたことがあります。それは、ノーベル賞として有名な**アルフレッド・ノーベルの「遺産は相続することが出来るが、幸福は相続することが出来ぬ」**という言葉です。いつの時代にあっても、最愛の我が子に残せる**最高の“遺産”**とは、**親の信念**を買き、**懸命に生き抜いた姿そのもの**ではないでしょうか。

虫の音、ススキ、月、さつまいも、運動会、マツタケ、コスモス、モミジ……。秋の深まりとともに、人としての生き方も深めていきたいと思う日々です。(晃)

